第三十八回　伊藤園お～いお茶新俳句大賞

俳句の創り方・・・

◎俳句を創る二つの約束

★五・七・五の十七音で創ってみましょう。(俳句は詩＝十七音の調べ・リズムが命です。)

にゃあにゃあ＝(　　)音　じゅぎょうちゅう＝(　　)音　しょっぱい＝(　　)音

★ひとつの俳句にひとつだけ季語を入れてみましょう。(俳句は季語に語らせる詩です)

(誤)風鈴が私の心を夏色に　→(正)風鈴が私の心を水色に

◎俳句の二つの創り方

★一物仕立＝ひとつの事柄だけを一句に表す方法で、一句一章で表すことが多い。

道のべの木槿(むくげ)は馬にくは(わ)れけり　松尾　芭蕉

鶏頭の十四五本もありぬべし　正岡　子規

★取り合わせ＝二つの事柄を複合して一句に表す方法で二句一章で表すことが多い。

五月雨や上野の山も見あきたり　正岡　子規

かたつむり甲斐も信濃も雨のなか　飯田　龍太

◎切れ

★俳句はモノに語らせて気持ちを伝える詩ですので、事柄を述べることはできません。詠嘆を導いて感動を深めたり、間と休止を生じさせ、広がりをもたせたりするために切れや切れ字を用いたりすることがあります。代表的な切れ字に「や」「かな」「けり」があります。

古池や蛙(かわず)飛び込む水の音　松尾　芭蕉

つばめつばめ泥が好きなる燕(つばめ)かな　細見　綾子

◎虫食い俳句

★○に一音の言葉(季語)を入れてみましょう。(→ヒント)

▽○○○○○○新品の風が街を行く　→　その年に初めて吹く南寄りの強い風　漢字三文字

▽○○○○○直視出来ない君の顔　→　強い太陽の日差しのもと　漢字三文字

▽○○○○○私を置いていかないで　→　ツバメや白鳥など別名候鳥

▽掴んでもあふれる程の○○○○○　→　天文　冬の天の川　漢字三文字

監修／川辺　幸一（現代俳句協会）

第三十八回 伊藤園お～いお茶新俳句大賞

高校生の部　過去作品集

誰もいない椅子を寄せてみる夜の端っこ

祖母が聞く餅の個数と近況と

間違えて乗った電車で雪を見た

負け試合靴ひも固く月ひとつ

ママ私もう雪を食べる年じゃない

答案の余白に泳ぐ金魚かな

今の私たぶん茶碗蒸しの銀杏

留守番の具なしラーメン外は雪

私だけ理解できないラブソング

中学のジャージで過ごすお正月

居残り後ここから山って見えるんだ

マフラーで溺れるようにチャリ漕いで

人参の芯の残るや明日受験

あの雲もきっと巨人の吐いた息

一瞬の背伸び切りとる初写真

鯨鳴く届かぬ声は僕が聴く

第三十八回 伊藤園お～いお茶 新俳句大賞

俳句とは・・・・・

俳句とは、五・七・五の十七音からなる、日本独自の定型詩の事を指し、「季語」と呼ばれる季節を表す言葉を含まなければならないというルールがあります。
「俳諧（はいかい）の句」という言葉が略されて、「俳句」と呼ばれるようになりました。

●特徴・・・必ず用いらなければならない季語

俳句は、和歌の上の句（五・七・五）と下の句（七・七）を別々の人が交互に作る連歌（れんが）の上の句だけが独立してできました。江戸時代に松尾芭蕉が「俳諧の句」として確立させ、大流行しました。

俳句は十七音という限られた文字数の中で、自然の美しさや人の心情を表現しなければなりません。
そこで、季語を入れる事によって、作者の意図する情景をわかりやすく表現する事ができます。
季語とは、その言葉が入るだけで、誰もがその季節を思い浮かべられる言葉の事を言います。

●起源・歴史・・・江戸時代に確立

「俳句」という言葉は、今からおよそ百年前、正岡子規（まさおかしき）を中心としたグループによって使われるようになりました。

俳句は江戸時代には俳諧と呼ばれていました。
この俳諧という言葉は、もとは「こっけい」・「おもしろ味」といった意味で、室町時代から江戸時代にかけてさかんに創られた連歌で使われていたものです。
連歌はもともとは、優雅な美の世界をめざすものでしたが、やがて本来の道からそれてこっけいな言葉の遊びとなりました。次第に、連歌の上の句（五・七・五）が独立して鑑賞されるようになり、今の「俳句」のもとになりました。
この独立したかたちのものを、「俳諧の句」と呼びます。
江戸時代には「奥の細道」の作者で有名な松尾芭蕉などが活躍し、広く庶民にも俳諧の文化が流行しました。

その後、明治維新後に登場した正岡子規が、この古くからの詩のかたちを、新しい詩としてよみがえらせようと考え、「俳句」という名前をつけました。そして今なお、その形態が継承されています

新俳句とは・・・・・

「季語」などの俳句がもつ厳密なルールは問いません。季語がなくても、多少「字余り」「字足らず」であってもかまいません。
厳密なルールにとらわれず、感じたこと、思ったことを五・七・五のリズムに乗せて自由に表現する独自の表現手法は「俳句」ならぬ「新俳句」です。

監修／川辺　幸一（現代俳句協会）

第三十八回 伊藤園お～いお茶新俳句大賞応募学校紹介

日本語俳句編

〈自分の言葉で意見が言える子供が増えました〉

福山市立御幸小学校　栄田美穂子先生

児童たちの語彙力低下が懸念され、〝言葉を大切に育んで欲しい〟という思いから7年前から新俳句大賞に取り組み始めました。五・七・五という短い言葉の組み合わせの中に〝楽しい〟、〝嬉しい〟、〝悲しい〟という言葉でなく、違う言葉で自分の気持ちを伝えること、絵が見えるようなイメージを大切にすることをポイントに指導しています。

日ごろから無理せず楽しく自由に創作させるため、職員室の前にその月の季語表を掲示したり、俳句投函ＢＯＸを設置し、毎月五百句の応募の中から優秀な作品を校長先生賞として発表しています。給食時間に発表するのですが、子供たちは期待と不安でこの日だけは学校内が静寂になり、放送に聞き入っています。いつも入ることのない校長室での表彰式も子供たちの創作意欲を刺激するようです。

このように当校では日常に俳句を創作することで、言葉にこだわり、自分の言葉で自分の意見が言えるようになった児童が増え、家族や友達とのひとつのコミニュケーションツールにもなっているようです。もちろん新俳句大賞は賞金が出たり、お～いお茶に掲載されるため、子供たちにとってとても興味を引くコンテストです。

〈同年代の入賞句を活用〉

帝塚山学院中学校　若林三枝子先生

毎年、冬休みの宿題で俳句を創り、新俳句大賞に応募しています。

新俳句大賞の特徴の一つでもあると思いますが、俳人だけでなく同年代の方でも上位賞に選ばれることが、生徒にとってモチベーション高く俳句創作に取り組んでいる理由だと思います。

著名な俳人の句だけでなく同年代の面白い俳句を紹介することで、生徒たち自身の言葉でも俳句を創れることを認識させることができ、新俳句大賞は俳句授業には欠かせないものとして活用しています。

〈句創作により、子どもたちの語彙や表現力が豊かになっています〉

八峰町立峰浜小学校　赤塚麻由先生

わが校では、近隣のお寺の住職のである柳川先生から、各学年ともに年に1～2回は俳句授業を受けています。

授業内容は、出張授業である「俳句教室」だったり、児童がお寺に出向いて座禅とともに俳句を習う「俳句道場」だったり、様々です。学校行事に柳川先生にも参加してもらい、その中で吟行を行うこともあります。

児童には、いつでも俳句がつくれるよう俳句手帳を持たせており、俳句創作が学校生活の中で習慣化しています。これにより俳句をつくったことがない1年生でも季節の言葉が自然と出てくるようになり、中高学年では語彙や表現力が豊かになり、他の分野においてもプレゼンテーション力が高まっていると感じます。

新俳句大賞への応募も、児童たちにとっては腕試しであり、通常とは異なる視点からの評価を受ける機会として活用しています。

〈継続的に創作することで、俳句のレベルアップを図る〉

愛知県立安城高等学校　髙橋貴絵先生

当校は、文芸部や授業の中で、積極的に俳句づくりに取り組んでいます。俳句の作り方を学んだ後、俳句づくりをし、句会を通じて俳句の楽しさを味わっています。

文芸部が出版している文芸誌「ユニコーン」では、句会に出した俳句や句会の結果を掲載し、各教室で紹介しています。また、部活動だけでなく、授業の中でも時々グループ句会などをしています。創作した俳句は、時期や内容に合わせて全国の俳句コンテストなどに投句しています。

新俳句大賞は、６年前から冬休みの課題や授業の宿題で取り組ませています。コンテストに応募し、賞に選出されることで、俳句への興味・関心がより高まっているようです。

新俳句大賞は「お～いお茶」に掲載されるため、生徒のモチベーションにつながるコンテストとして活用しています。